

---

# 遊戯王GX 時代を超えた転生者

アマ公

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 時代を超えた転生者

### 【Nコード】

N6547Z

### 【作者名】

アマ公

### 【あらすじ】

子供を助けて死んでしまった「南 彩人」がいろいろなデッキを使って遊戯王GXの世界を過ごしていく。

シンクロやエクシーズをしますのでにがてなかたは読まないようにしてほしいと思います。  
できれば感想などを書いてもらえると主のやる気ができるので願います。

## 序章（前書き）

初めまして「アマ公」です。

初めて小説を書いたのでわかりずらいところも多々あると思いますが、暖かい目で見守ってもらえると幸いです。

自分のペースでできる限り投稿していきたいと思えます。

## 序章

side???

小説でよくある話かもしれないけど俺は今神様の前にいる。

神様曰く俺は一度車にひかれそうな子供を助けて自分が死んでしまつたらしい。

そこで俺は神様に気に入られたようでも遊戯王GXの世界に転生させてくれるらしい。

俺の名前は「南 彩人」（みなみ さいと）遊戯王が好きな高校生だった。

生前はテレビで遊戯王ZEXALがテレビでやっていたのを覚えている。

side out

「お前は生前に体を張って子供を助けたいいやつじゃったかろのおゝそのまま逝かせてしまうのは惜しいからお前の好きな遊戯王の世界に転生させてあげようと思つたのじゃよ」

つと神様が言つてくださいましたので

「それじゃあよろしくお願いします。」

「それでじゃ、転生させるさいになにかオプション的なものをつけてやってもいいのじゃがどうする？」

「なにか希望することはあるかね？」

「それじゃあ、今俺が使っているカードとデッキを持っていきたいのと原作に出てくるキャラクターと同じくらいのディスプレイード

ローをお願いしたいです。」

「それぐらいなら構わんじやろ」

「シンクロモンスターやエクシーズモンスターも持っていくのかね？」

正直、遊戯王GXに出てこないシンクロモンスターやエクシーズモンスターを持っていくのはどうかと思ったが、やっぱりもっていき  
たいな。

「シンクロモンスターやエクシーズモンスターもお願いします。」

「わかったのじゃ、それじゃあカードは随時送ることにしよう。」

これから好きな遊戯王の世界にいけると思うとなんだか楽しみにな  
ってきたな！

楽しいデュエルをたくさんできるといいな！！

「それじゃあ転生させるぞ」

「入学試験当日におくるからのぉ〜新たなよい人生になるように働  
も力をかすからの」

こうして俺の新たな人生が始まりを告げる。

## 序章（後書き）

文章考えるのって難しいですね（泣）

次は入学試験です。

デッキはその時に紹介したいと思います。

## 第一話 入学（前書き）

2話目です。

今回はヒロインになる予定の女の子のデュエルです。

ハッキリ言ってた強いですはい。

クリスティア苦手ですね。

## 第一話 入学

本当に遊戯王GXの世界に転成者してきたんだなあ。

目の前にある海馬ドームを見上げながらそう思った。

「記憶はちゃんと残ってるんだな」

腰にはデッキがひとつついていて、

腕にはデュエルディスクがついていた。

「突っ立ってても仕方ないし中に入るか。」

中に入ってみるとすでに実技試験が始まっていた。

「そういえば俺って受験番号何番だっけ？」

ゴソゴソとポケットの中から受験票を取り出して見てみると。

「受験番号112番 南みなみ彩人さいと」

原作では十代が110番だったはずだから俺の他に原作にはいなかった人がいるってことか。

「てか俺って十代よりバカってことか！」

自分で突っ込んでしまったorz

そんなことを考えて落ち込んでいると…

「くらえ！ スカイスクレーパーシュート！」

「マンマミーヤ！ 私の『古代の機械巨人』が」

やっぱりソリッドビジョンはかっけ〜な？

十代に負けて落ち込んでるクロノス先生が退場して新たな試験官が出てきた。

「次！ 受験番号111番！」

「はい…」

緊張しているのか少しおどおどしながら女の子が出てきた。

デッキをディスクにセットするぐらいには少し落ち着いてきたみたいだ。

「それでは試験を始める」

「『デュエル？』」

「私のターン ドロー！」

先行は試験官からのようだ。

「『シャインエジェル』を守備表示で通常召喚」

守 800

「リバースカードを二枚セット」

「ターンエンド」

「私のターン ドロー」

「手札から『大嵐』を発動します」

「何？」

リバーズカードは激流葬とミラーフォースか  
危なかったな。

「さらに手札から『ヘカテリス』を捨てて効果発動します、デッキから『神の居城ーヴアルハラ』を手札に加えます。」

「そして手札から『トレードイン』を発動します。」

「手札交換カードか」

「手札事故でも起こしているのかな？」

手札交換カードを使って手札事故とか言ってる時点で負けフラグだよな。

俺の予想が正しくて手札に蘇生カードがあつたら女の子の勝ちだな。

「手札から『神の居城ーヴアルハラ』を発動します、そして手札から『墮天使アスモディウス』を特殊召喚、そして効果発動、デッキから『大天使クリスティア』を墓地に送ります。」

「手札から『死者蘇生』を発動します。墓地の『墮天使スペルビア』

を特殊召喚します。

『スペルビア』の効果で墓地の『クリスティア』を特殊召喚します。

」

あーあ、

あの試験官終わったな。

まだいけるみたいな顔してるけど『クリスティア』の効果知らないのかな？

「バトル！」

「『クリスティア』で『シャインエンジェル』に攻撃します。」

「……………」

名前が思いつかないらしい。

いつの間にか『クリスティア』が『シャインエンジェル』を切り裂いていた。

「くっ やるな！ だが『シャインエンジェル』が戦闘で破壊された時デッキから攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚できる！」

「私はデッキから『クリスティア』がフィールドにいる限りお互いに特殊召喚をする事ができません。」 なんだと？

「残り2体のモンスターでダイレクトアタックします！」

「ぐああ〜?」

L I F E 4 0 0 0 I 1 9 0 0

「ありがとうございました」

小さくお辞儀をして女の子はデュエル上から降りて行った。

後攻ワンターンキルですか。

目立つ事するなあ〜ww

会場がざわついてるよw

「さて、次は俺の番かいつちよ楽しんで来ますか!」

## 第一話 入学（後書き）

始めてデュエルしてるところ書きましたが難しいです（泣）  
技の名前は思い浮かばなかったので今回ははぶきましたw

よくわからないかもしれませんが暖かい目読んでやってください。  
それでは次回彩人がデュエルします。

## 第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?(前書き)

今回は彩人君のデュエルです。

結構悩んだんですけど最初からシンクロしていくことにしました。

それではクロノス先生の悲惨なデュエルをお楽しみください W W

## 第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?

side 彩人

受験番号111番の女の子のデュエルが終わって俺が呼ばれる番がやってきたようだ。

俺の相手は誰なんだろうな？

そつえば腰にひとつデッキついてたけど中身確認してなかったww  
どうしよう、なんのデッキかわかんないや。

まあデュエルが始まってからの楽しみということにしとこうかな。  
俺が前世で使っていたデッキなら正直この場で負ける気はしないからな。

自分のデッキを信じて楽しくデュエルとでもいきますかね。

side out

「次っ！ 受験番号112番!!」

「ほーい」

っと呼ばれたのでデュエル上になってみるとそこにはクロノス先生が立っていた。

やっぱり試験の相手はクロノス先生じゃないとねww

「さっきのドロップアウトボーイにやられたうさはらしをしてやる  
ノーネ。」

「恨むならさっきのドロップアウトボーイを恨むノーネ。」

「すみませんが負けてあげるつもりはないのでよろしくお願いします。」

「楽しいデュエルにしましょう。」

「ドロップアウトーが何ほざくノーネー!!」

「返り討ちにしてやるノーネー!!」

「デュエル!!」

「私のターンなノーネ ドローニヨ」

どうやら先行はクロノス先生らしい。

「私は『トロイホース』を攻撃表示で召喚なノーネ、そして手札から『デュアルサモン』を発動するノーネ、『トロイホース』を生贄にして最強のモンスター『古代の機械巨人』を攻撃表示で召喚するノーネ。」

A / 3000

さすがはクロノス先生、最初のターンで『古代の機械巨人』を召喚してくるなんてな。

最後のころの改心したクロノス先生は好きなんだけどな。

「リバースカードを2枚セット、ターンエンドなノーネ。」

クロノス：手札1枚

私のアンティークギアゴーレムを破壊できるとは思わなければいけません。一様念には念を入れとくノーネ。

リバースカードは『リミッター解除』と『ミラーフォース』なノーネ。

コテンパンにしてやるノーネ。

「俺のターン ドロー！」

おおっ、このデッキは俺が使ってたデッキで安定して強かったデッキじゃんか

しかもこの手札・・・ぶつちゃけワンキルじゃん

「俺は手札から『大嵐』を発動！」

大嵐ってほんと強いよな。あ

一枚でとるアドバンテージじゃないよな。

「ペペロンチーノ!?!」

危ない危ないww

あんな危ないもん伏せてるなんてどんだけ手札いいんだか。

まあ俺も人のこと言えないかw

「『未来融合ーフューチャー・フュージョン』を発動！ 対象は『ファイフ・コック・フット・フット』  
F・D・G』デッキから素材として『ドラグニティアームズ・レヴ  
アティン』2枚と『ドラグニティーフアランクス』2枚、『ドラグ  
ニティーフアキュリス』を墓地に送る。』

会場のみんながざわざわしている。

それもそうかこの時代に『ドラグニティ』はないからな。

「聞いたことがないモンスターなノーネ」

「これから忘れられないようにトラウマにしてあげますよ」

「なにを言っているノーネ、私の場には攻撃力3000のアンティ



「チューナーモンスターってなんなノーネ!? 聞いたことないノ  
ーネペペロンチーノ」

会場のみんなも気になっていようで首をかしげている。

「それについては後で説明してあげますよ。」

「レベル4の『ドウクス』にレベル2の『ファランクス』をチュー  
ニング」

「神の力が槍に宿りて。われの道を切り開かん! シンクロ召喚! 突  
き刺せ『ドラグニティナイトヴァジュランダ』」

A / 1900

「「「「「!?」「」「」」

会場のみんなが啞然としている。

「どうなっているノーネ、そのモンスターはどうやって出ってきた  
ノーネ!? 説明してほしいノーネ!」

「シンクロ召喚はチューナーモンスターと呼ばれるモンスターとチ  
ューナー以外のモンスターのレベルを足して特殊召喚する方法です」  
「レベル4の『ドウクス』とレベル2のチューナー『ファランクス』  
でシンクロすることでレベル6の『ヴァジュランダ』を特殊召喚し  
たわけです。」

「驚いたノーネ 初めて見たノーネ それでもただの攻撃力1900のモンスターじゃわたしのモンスターは倒せないノーネ。焦らせないほしいノーネ」

「焦らないでほしいですね『ヴァジュランダ』の効果発動、墓地からレベル3以下のドラゴン族・ドラグニティを装備することができます、効果で墓地の『アキュリス』を装備！」

「そして手札から『死者蘇生』を発動！墓地の『レヴァティン』を特殊召喚！」

A / 2600

「『レヴァティン』は特殊召喚されたとき墓地のドラゴン族を装備することができる！もう『フランクス』を装備、そして『フランクス』の効果で特殊召喚！」

「リバースカードを2枚伏せレベル8の『レヴァティン』にレベル2の『フランクス』をチューニング」

「3つの首を持つ龍よ。その巨大な力で敵をねじ伏せる！シンクロ召喚！喰らい尽くせ！『トライデント・ドラギオン』」

A / 3000

「『ドラギオン』は召喚に成功した時自分フィールド上のカードを破壊することでその枚数分攻撃することができる！リバースカードを2枚破壊して3回分の攻撃の権利をえる！」

「3回攻撃ができたとしてもアンティークギアゴーレムと同じ攻撃力じゃどうしようもないノーネ」

正直焦ったノーネ

「『ヴァジュランダ』の効果は装備するだけじゃないんですよ先生」  
「なんですーのペペロンチーノパルメザンチーズ!？」

「『ヴァジュランダ』の効果発動!装備カードを一枚墓地に送るところで攻撃力を倍にする!」

A / 1900 3800

「攻撃力3800とかありえないノーネ アンティークギアゴーレムが戦闘で負けてしまうノーネ」

「そして墓地に送られた『アキュリスの』効果発動!装備状態のこのカードが墓地に送られたときフィールド上のカードを1枚破壊する! 先生の『古代の機械巨人』を破壊します」

「戦闘じゃなくて効果で破壊されてしまったノーネ!？」

「これじゃ場ががら空きなノーネ!！」

「バトル!!!」

「『ヴァジュランダ』で先生にダイレクトアタック」

「雷牙槍!」

雷をまとった槍で先生を突き刺した。

LP 4000 200

「ドラギオン』でダイレクトアタック」

「破滅のトライデントストリーム」3連打ああああ!!

5連打カイザー的なノリで言ってみたけど案外楽しいかもしれないww

「なんでこうなルーノ ペペロンチーノ!?!?」

LP200 18800

「楽しいデュエルでしたよ先生、またやりましょうね トラウマに  
ならないといいですねww」

## 第二話 シンクロ召喚 やっぱりワンキル!?(後書き)

長い文になってすいませんでした。

最初はやっぱりワンキルでしめないとだめですよねww

彩人の最初のデッキは『ドラグニティ』でした。

普通に強いですよww

ペペロンチーノ個人的に好きですよww

次はたぶん短めの分になると思われます。

デュエルが終わった後を書いていきたいと思えます。

**第三話 フラグ立てちゃった？（前書き）**

今回はデュエルなしです。

彩人君はなんかフラグ立てちゃってます。

### 第三話 フラグ立てちゃった？

「楽しいデュエルでしたよ先生、またやりましょうね トラウマにならないういすねww」

side???

私は彼のデュエルを見てとてもかっこいいと思い彼に興味をもった。

シンクロ召喚という未知の召喚方法を使ってあの変な先生をワンターンキルしてしまった。

正直とてもかっこよかった。

なんだろうさつきから彼のことが気になってる。

こんな思いになったのは初めて・・・

sideout

side彩人

「派手にやちゃたけどだいじょうぶだよな。」

そんなことを考えていると向こうから十代達<sup>覇王</sup>がやってきた。

「すげーデュエルだったな！！あんなの初めて見たぜ！ 俺、遊戯十代。気軽に十代でいいぜ。」

「なんかすごい目立ってたすよ、けどかっこよかったす。僕、丸藤 翔。翔でいいすよ。」

「君のデュエルには興味があるこれからそれを調べてみたい。俺は

三沢 大地だ。よろしく」

いきなり原作キャラとコンタクトとっちゃたよw  
これも神様の加護ってやつかな？

「三人ともこれからよろしくな。俺は南 彩人だ。彩人って呼んでくれ。」

「それより俺とデュエルしてくれよ！彩人のかっこいいモンスターをみたいぜ！！」

なにいつてんだかこの霸王は、さすがに目立ちすぎた。今日はもうあんまり目立ちたくないんだよな。

「わるいな十代、また今度な。」

「ええ〜、デュエルしようぜ〜。」

十代にせがまれて困っていると。あのワンキルしてた女の子をみつけた。

「ちよつと用事ができた、じゃあまた今度な。」

「十代、入学したらデュエルしようぜ。」

「わかった、絶対だからな！」

「また今度っす。」

あれ？だれか忘れてる気がするけどまあいつか。  
あの子に話しかけてみよ。

「おおーい」

side out

side???

「おおーい」

「きゃっ!?!」

突然さっきまで考えていた彼から声をかけられて驚いてしまった。

「わるい、驚かせちゃったな。」

近くで見ると案外かっこいいかも。

「どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

どうやらじっと見てしまったらしい。

「何でもないです．．．どうしたんですか？」

side out

side 彩人

声をかけたら驚かれてしまった。

「わるい、驚かせちゃったな。」

なぜか俺の顔をじっと見ている。案外かわいいかもしれない。

「どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

「何でもないです・・・どうしたんですか？」

「さっきあの先生相手にワンキルしてただろ？つよいんだな〜って思ってたな。」

「それと後ろにいる小さな大天使も気になっただ。」

俺もさっき十代の時に気づいたんだが精霊が見えるようになったらしい。

正直おどろいた、後で十代にも教えておこう。この子が気になっただ言いそびれちゃったからな。

「この子が見えるんですか？」

「ああ、さっきのデュエルで活躍してた『大天使クリステイア』だろ。」

そう彼女の背中にはデフォルメされた『クリステイア』がいる。

「自己紹介がまだだったな、俺は、南 彩人だ。 彩人って呼んでくれ。」

「私は須藤<sup>すどう</sup> アキっていいいます。下の名前で呼ぶのは少し恥ずかしいです。」

「わかったアキな。できれば慣れてるから下の名前の方がいいんだ

が、まあ恥ずかしいならしかたないか。」

「俺には精霊はいないんだが精霊が見える者同士よろしくな。」

「はい、よろしく願います。」

そのあと雑談したり、連絡先などを交換してわかれた。

「しかし、あの子かわいかったな。」

顔をじっと見られたときは少しドキッとしてしまった。

「俺も精霊が見えるとわな。」

「まあ深く考えても仕方ないな。楽しくデュエルできればそれでいいや。」

side out

sideアキ

声をかけられたときはびっくりしてしまった。

近くで見たらかつこよかったからすこしドキドキしてしまった。

「南さんも精霊が見えるとはおもわなかったな。」

「話してて楽しかったな。また会いたいかも。」

**第三話 フラグ立てちゃった？（後書き）**

やっぱり書くのって難しいですね。

アキちゃんの登場です。

後でキャラに関しては紹介したいと思います。

誰か途中から忘れてます。

次はサンダーさんが出てくるかもしれません。

第四話 方向音痴の残念な子（前書き）

今回はデュエルないです。

万丈目さん少ししか名前でないです。

アキと彩人急に仲良くなってます。

今回は面白い感じになっていればいいと思います。

## 第四話 方向音痴の残念な子

side 彩人

入学試験から数日がたって合格通知が来た。

この数日何をしていたかというところ。

この時代のことを調べたり、アキと連絡を取ったりしていた。

この時代の禁止制限は本当にゆるい。

『強欲な壺』や『天使の施し』、極めつけは『苦渋の選択』だろう。墓地確認などがなかったため本当に強いと思う。

俺が使っていたデッキでは、自分のデッキを削っていき最後には墓地から特殊召喚などのギミックを使ったデッキを作っていた。墓地確認がないためより奇襲がかけやすくなったと思う。

今はカードが数枚と『ドラグニティ』のデッキしか持っていない。神様が随時送ってくれると言っていたからアカデミアにおいてあるのかもしれない。

まあ、持ち運ぶ手間がなくて済むのだが、正直デッキをいじってみたくてしょうがない。

「アカデミアで楽しいデュエルがいっぱいできればいいな。」  
side out

数時間後船で気持ち悪くなったのは別のはなし。

「やっとついた。」

死ぬかと思った、船にはもう乗りたくないな。

「ワンキル決めたのにオシリスレッドかあ。まあオベリスケブルとかより全然いいんだけどな。」  
船の中で渡された制服は赤色だった。

「さて、そろそろ寮に向かうか。」

このとき彩人は寮の方向とは全く別の方向に進んでいることには気づいていない。

「これは俗にいう迷ったというやつなのか？」  
森の中をさまよっていた。

そこっ！森に入る前に普通気づくだろうとか突っ込まない！！

「どうすっかな、腹減ってきたな。」

入学初日に遭難とか笑い話にしかなんねえよ。

「この学園内で連絡先知ってるのアキぐらいしかいないんだよな。」  
そこっ！友達いないんだよな。とか突っ込まない！！寂しくなるだろうが！！！！

PDAを取り出しアキに電話をかけてみることにした。  
数回呼び出し音が鳴った後アキが出た。

「もしもし？どうしたの？」

どうでもいい話だが、この数日でアキとは仲良くなった。

「森で迷ってしまった。」

「…ぷっ 天使さんを迎にいかせるねw」

「どうでもいいことなだけどさ、今笑ったよね!？」

しかもこの状況で天使迎にいかせるってしゃれにならないからね？」

「じゃあずっとそこにいれば？」

「…ごめんなさい。」

そんな話をしていると、『クリスティア』が迎えに来てくれていた。すでに迎を出してくれていたなんていいやつや…

「今『クリスティア』が迎えに来てくれたよ。」

「ありがとうな」

「どづいたしまして。」

「じゃあ、また今度な。」

PDAをしまつて、『クリスティア』についていくとぼろぼろの寮についた。

寮につくと、『クリスティア』はかえっていった。

「やっぱりぼろいな。」

自分の部屋を見つけて中に入ってみると。

「すごい量のダンボールだな」

部屋には大量のダンボールがあり大量のカードが入っていた。デッキはひとまとめになっており、カードもきちんと整頓されていた。

「さて、歓迎会までの間にデッキでもいじるかな。」

確認していくと、宝玉獣をはじめとしたこの時代の特定の人物しか持っていないカードも3枚ずつ入っていた。さすがにそれには驚いた。

「まあ、さすがにこの辺は使えないよな。」

しばらくいじっていると歓迎会の時間になっていた。

歓迎会はそれなりに楽しかった。

そして今、十代達の部屋にいる。

「なるほど、万丈目とかいうやつに目をつけられたわけだ。」

「なら、お前らのデッキを少し強化するか。もちろんお前らが望むならだが?」

「そんなことしてもらっていいのか」

「ああ、幸いカードは俺の部屋にたくさんあるからな。」

「面白そうだから俺はお願いするぜ!」

「僕もお願いするっす!」

二人のデッキをいじりつつ二人の個性を生かすために三人で散々悩んでデッキが完成して  
PDAがタイミングよくなった。

「どうやら十代を呼び出したみたいだな。」

「どうする十代？いくのか？」

「当たり前だろ！デュエルがたくてウズウズしてるんだからな！」

「それなら俺もついていくとしよう。」

「サンキューな。」

「なら僕もついていくす。」

そして三人してデュエル場へと向かった。

#### 第四話 方向音痴の残念な子（後書き）

十代と翔のデッキ強化しました。

ちなみに今の段階ではシンクロは詰ませていません。  
純粹にHEROビートです。

次回はちゃんとデュエルがあります。

## 第五話 VS万丈目(前書き)

はっきりいって悲惨なデュエルです。  
万丈目さんかわいそうです。

## 第五話 VS万丈目

「よく来たな！ドロップアウト！！逃げずに来たことを誉めてやるう。」

うわあ〜いきなり小物っぽいこと言っちゃってるよ。恥ずかしくないのかな？

「つきさまあああ〜〜〜」

おろお？もしかして口に出しちゃってた？俺としたことがやってしまったな。

「わるい。思ったことがつい口に出てしまった。」

「もう我慢できん！そっちのドロップアウトから叩き潰してやろうと思ったが計画変更だ！！お前から叩き潰してやる！！！！」

「いいけど、俺はわざと負けてやるほど優しくないぞ？」

「よくもここまで俺をこけにしてくれたな！」

「アンティールだ！お前が負けたらシンクロモンスターとやらを俺によこせ！！」

シンクロモンスターだっけあってもどうするんだか。こいつやっぱりばかだろ。

「俺が勝ったら何をくれるだ？」

「ふんっ、そんなことは絶対にならないが、もし本当に負けたら何でも好きなカードをやるっ。」

「その言葉忘れるなよ。」

「なんか俺らおいてかれてるな。」

「そうっすね。」

ぼやいている二人がいたそうっす。

「デュエル!!!」

「俺のターン ドロー」

俺の先行。

原作では、ガードマンが来て途中で終わるんだっつたな。早々に決着をつけないと。

正直カードはいらなないがこいつのプライドはへし折ってやりたい。

「このデュエル早くおわせそうだな。」

「なんだとキサマ！嘘をついてないでさっさとターンをすすめる！」

「言われなくてもそうっすさ。」

「俺はモンスターを1枚伏せ手札から『ガーディアン・エアトス』を特殊召喚。」

「レベル8のモンスターを生贖なしで特殊召喚だと!？」

「彩人君、あんなすごいカード持ってたんすね。」

「かつこいいい~~~~俺も彩人とデュエルしてえ~~~~!!」

「『ガーディアン・エアトス』は墓地にモンスターがない時、特殊召喚することができる。」

「リバーズカードを4枚伏せてターンエンド。」

彩人：手札 0

モンスター 2

リバーズ 4

「俺のターン ドロー!」

「俺は『リボーン・ゾンビ』を守備表示で召喚!」

D / 1600

「さらにリバーズカードを1枚セット ターンエンド。」

どうでもいいからこの辺の原作は覚えていないが。

「エンドフェイズに、『サイクロン』リバーズカードを破壊する！」

「なんだと！俺のカードが!?!」

『ヘル・ポリマー』か、わりとどうでもいいが。

万丈目：手札 4

モンスター1

リバーズ0

「俺のターン ドロー。」

「スタンバイフェイズにリバーズカード発動。『チェーン・マテリアル』、このカードを発動したターンのエンドフェイズまで融合素材を、デッキ・手札・フィールド・墓地から除外することで素材とすることができる。」

まあ、攻撃宣言できないことや、エンドフェイズにフェイズに破壊されるデメリットがあるがこのデッキでは関係ない。

「伏せていた『メタモルポット』を反転召喚。」

「効果でお互いに手札をすべて捨て5枚ドロウする。俺は1枚カードをすてる。」

「ちっ俺は4枚だ。小賢しい真似を。」

「手札からフィールド魔法『フュージョン・ゲート』を発動。お互いに融合する場合融合素材を除外することで融合をおこなえる。」

「『チエーン・マテリアル』の効果発動。デッキから『E・HEROオーシャン』と『E・HEROフォレストマン』を除外して融合召喚。」

「希望を力に変える最強のHERO!いでよ。絶対零度のHERO『E・HEROアブソルトzero』」

A / 2500

「アニキと一緒にのE・HEROっす!」

「俺にくれたカードの中にも入っていたけど。彩人もHEROを使っただな!」

「『アブソルト』をリリースして、手札から『カタパルト・タートル』を準備表示で召喚。」

D / 2000

「この瞬間『アブソルト』の効果発動!このカードがフィールドを離れたとき、相手のモンスターをすべて破壊する!」

「なんだと!?!フィールドを離れるだけで効果が発動するモンスターだと!?!」

「どつやらのターンで終わりのようだな。」

「そんなはったりは俺にはきかん！」

「まだライフは4000ものっこっているんだ」

「4000しかの間違いだろ？」

「さらに『チェーン・マテリアル』の効果発動。今度は、デッキから『E・HEROバブルマン』・『E・HEROフェザーマン』・『E・HEROバーストレディー』・『E・HEROクレイマン』を除外して融合。」

「すべてを優しく包み込む光を放て！『E・HEROエリクシーラ』」

A / 2900

「召喚に成功した時除外されているカードをすべてデッキに戻す。」

「さらに『カタパルト・タートル』の効果発動。」

「『エリクシーラ』をリリースして、攻撃力の半分のダメージを与える。」

LP 4000 2550

「もうわかったよな万丈目？」

「こんなことはありえない！俺が何もできずに負けるなんて！」

「もう一度『アブソルート』を召喚し、『タートル』の効果発動」

LP 2550 1300

「『エリクシーラー』を召喚し、『タートル』の効果でリリース。」

LP1300 1150

「俺がなにもできずに負けるだと。」  
万丈目が膝をがっくりついて悔しがっていた。

「楽しいデュエルだったぜ万丈目。次はちゃんと戦えるようにしろよ。」  
「はいそこっ！えげつないデッキ使ってるくせによく言うつよって目でみない！」

いつの間にか明日香も来ていた。

「あなたってひどい人なのね。」  
「なんか俺の評価下がった。」

「やばいは、ガードマンが来たは！」

それから各自解散して寮に戻っていった。

「南 彩人。面白いひとね。」

明日香の評価が上がったようだ。

## 第五話 VS万丈目（後書き）

『チェーン・マテリアル』と『フュージョン・ゲート』の愛称は抜群です。

純粋なビートにも使えます。

『エアトス』出した意味がない。

墓地の調整が可能なので入ってます。

遊戯王のアニメではそうは出てこないバーンデッキにしてみました。

このコンボを止めるのは結構大変です。

なにげ今まで書いてるデュエルワンキルなんですよね。

次くらいからはちゃんとした対戦にするつもりです。

## 第六話 人物紹介と設定（前書き）

今回は人物紹介とデッキの説明をしていききたいと思います。

## 第六話 人物紹介と設定

『南 彩人』身長178cm

体重68kg

見た目は想像では、エア・ギアに出てくる南みなみ 樹いつきを大きく成長させた感じです。

しっかり者ではあるが、天然が入っていてボケたりしています。

最近アキのことが気になり始めているこの物語の主人公。

いろいろなデッキを使うことができるタクティクスを持ち合わせていて神様にももらったドロアの運もあり普通に対戦しているとワンサイドゲームになることもしばしば。

友達や大切な人を傷つけられると我慢できない性格。後先考えずにつっぱしってしまいがち。

今までに使用したデッキ：「ドラグニティ」（忍者の登場などでいろいろな派生がある安定感があるデッキ。『竜の渓谷』を引けば毎ターンシンクロにつなげることができる。

ただし、長期戦になってしまうとサーチしてくるモンスターが尽きてしまうので、早々に決めるか、『ガルドスの羽根ペン』や『貪欲な壺』などが必要になる時がある。使う前に終わることがほとんど。）

「マテリアルHERO」（バーンやビートもできるなかなか面白いデッキ。必須カードは『フュージョン・ゲート』、『チェイン・マテリアル』、『エリクシーラー』を融合するための素材。あとは『サイクロン』や『大嵐』を対処できるようにすればワンターンキルも可能。）

これからもいろいろなデッキを使用する予定です。

儀式に特化させたデッキなども使います。

「須藤 アキ」身長160cm

体重50kg

スリーサイズ??? (教えてくれませんでした。)  
見た目は想像では、エア・ギアに出てくる野山野<sup>のやまのりんた</sup> 林檎を幼くした感じ。

出るところ出て、ルタイル抜群です。

性格は、おとなしく恥ずかしがり屋で人見知り。彩人には心を開いている。彩人相手だと違った一面を見せる。案外Sだったりするのかもしれない？

今までに使用したデッキ：「終世」(「ヴァルハラ」や「死皇帝の陵墓」などから高攻撃力のモンスターが出てきて場を制圧。「クリステイア」 「光と闇の竜」などで相手の反撃を許さない。) 某カードショップのデッキを使わせてもらってます。  
一様このデッキを主にやっていく予定です。

ご要望があれば感想などを書いていただければ考えていきたいと思っています。

人物紹介はこんなところにしたと思います。

彩「こんなくだらない小説だが、読んでくれるとうれしい。」

ア「よろしくお願いします」「ペコッ

彩「かわいいな」

ア「…//」

ラブコメになってきた二人は置いて次回はラブレター事件を書く予定です。

まだ彩人とアキはお互いの気持ちに気づいていないという設定になっていますので、その辺をご理解お願いいたします。

## 第六話 人物紹介と設定（後書き）

感想を書いてもらえるとうれしいです。

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？（前書き）

今回はデュエルないです。

今主は運が尽きていて最悪です。

自転車に追突されたり。

失恋したり。

いくつか買い物したら一つ袋に入れられてもらえず、寒い中もう一度取りに戻ったり。

そんなんで投稿したのでグダグダです。

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？

「やべえやっぱリアキは強い。俺がこんなに追い詰められるなんて。」

「うぬぼれじゃないがこの世界に来てから、もともとあったタクティクスに加えて神様からもらったドロー運がある。なのに追い詰められている。」

「このドローで決まるんだな。」

俺は目を閉じて自分のデッキを信じ静かに引き抜いた。

「彩人お~~~~~翔がさらわれた!!」

「いきなり入ってきてそれじゃよくわからない。ちゃんと説明しろ。」

「まあ、原作を覚えているから十中八九偽のラブレターでクロノスに騙されて風呂を覗いたという事で捕まったんだろ。」

「さつきメールで、『マルフジシヨウハアズカッテイル。カエシテホシクバ、ジヨシリヨウニコラレシ。』ってきたんだよ!」

「そうか、そういうばさつきアキからもメールが来ていたな。」

「それはいつものラブラブのメールだろ？」

「いいから聞けバカ。『ええーと、もし大丈夫だったら女子寮のところまで来てくれないかな？』」

「やっぱりラブラブだな！」

「ラブラブでもないし、いつもメールか電話だ。そうそう呼び出されることなんてないだろ？さっきのメールに関係してるのは丸わかりだろ。」

「そうか。俺は行くけど彩人はどうする？」

「俺も行く。」

もし本当に翔が風呂を覗いてアキが見られたとしたら…翔の命は今日までだな。

二人して女子寮へと向かった。

なぜわざわざボートを漕いで湖の上で話をしなければいけないんだ？ボートの上には手足を縛られてとらえられている翔と、明日香・ももえ・じゅんこ、そしてなぜかアキがいた。もしかして本当に翔は覗いたのか？

「んっでなんで翔は捕まってるんだ？」

「こいつがお風呂を覗いたのよ。」

「アニキ〜彩人君助けて〜うるせえ黙れ。」ええ？」

「アキお前も覗かれたのか？」

「わかんないけど…一緒に入ってたからもしかしたら…」

「俺はそっち側について翔を殺すでしょう。」

「ちょっとまってほしいっす！！僕は覗いてないっす！！」

「…ほんとうだな？」

「すこし黒いオーラと殺気をだしながら聞いた。」

「ひっ！？絶対っす！！神様にちかっす！！」

「わかった。それならいい。」

笑顔で答えてやる。

この場にいた誰もが彩人を敵に回してはいけなさと感じた瞬間だった。

「っでどうしたら翔を返してくれるんだ？」

「一番最初に立ち直った十代が訪ねた。」

「デュエルをして勝ったら返してあげるは。」

「わかった。どういつ風ににデュエルするんだ？」

「私と十代。アキと南君でどうかしら？」

「どうでもいいんだが南君っていうのはやめてくれないか？彩人でいい。」

「わかったわ。だけどあんまりそんな事言ってる私の隣の子に殺されないといいわね。」

明日香の隣でアキが変なオーラを出してこっちを見ていた。

「ええ〜とごめんなさい…。」

「彩人君その口閉じようか？」

「以後気を付けさせていただきます。」

「「「「「さっきまでの彩人の面影ねえ〜〜〜！！」「」「」」

「そろそろデュエル始めましょうか？」

「わかった。」

「どんなデュエルができるかわくわくしてきたぜ！」

「彩人君よろしくね。」

先に十代と明日香がデュエルを始めるようだ。

一緒にやらないのかって？

お互いにデュエルが見たいんだから仕方ないじゃん。

「デュエル！！」

第七話 伏線？ 本当に怖いのは？（後書き）

最初の文はアキと彩人のデュエルの伏線です。

裏スリ作ったりデツキ作ってたら更新遅れてしまいました。

## 第八話 明日香VS十代（前書き）

十代の強化されたデッキのお披露目です。  
そこまで強化はしませんでした。  
ドロー云々で十分すぎるので。

## 第八話 明日香VS十代

「デュエル!!!」

「先行は私、ドロー」

「『エトワール・サイバー』を攻撃表示で召喚。」

A / 1200

「さらにリバーズカードを一枚伏せてターンエンド」

明日香：手札4

モンスター1

リバーズ1

「俺のターン ドロー!」

確か『エトワール・サイバー』ってダイレクトアタックするとき600ポイント攻撃力が上がるんだよな。

その効果を十代が理解しているかはわかんないが…まあ十代のデュエルは見てて面白いからいいものだ。

「手札から『増援』を発動!デッキから『E・HEROエアーマン』を手札に加えてそのまま召喚。」

A / 1800

「『エアーマン』の第2の効果発動！デッキから『E・HEROバブルマン』を手札に加える。」

十代のデッキは俺が持っていたカードで強化した。

漫画版の十代のデッキに近づけながらもアニメ版のデッキを基本にしている。

その分、アニメ版よりは安定しているが、漫画版よりは安定していない。

強化しすぎてのちに出てくるネオスを手に入れるのを妨害したくない。

「さらに手札から『融合』を発動！場の『エアーマン』と手札の『バブルマン』を融合！」

「俺と彩人の絆を繋ぐカード！力を示せ！『E・HEROアブソルトzero』」

A / 2500

「バトル『アブソルト』で『エトワール・サイバー』に攻撃！— Freezing at moment 《瞬間氷結》」

私のリバースカードを警戒しないなんてなめてるのかしら？

「リバースカードオープン『ダブル・パッセ』このカードは攻撃をダイレクトアタックにする。そのあと攻撃対象となったモンスターでダイレクトアタックをすることができる。」

明日香 LP 4000 1500

十代 LP 4000 2200

最初から攻撃力が高いモンスターが出てくるとは思わなかったは。こんなにLPが削れてしまったけど次のターンに『エトワール・サイバー』を守れた。

融合に繋げて次のターンに畳み掛けるは。

明日香ってこんな大胆な戦術をとるんだな！

俺にはこんな戦術おもいつかないぜ！やっぱり明日香はすごいな！

お互いにLPを削られたな。

この世界では攻撃力2500って最初のターンからは出てこないのか？

まあなんにせよこのデュエルは早く終わりそうだな。

「俺はリバーズカードを1枚伏せてターンエンド。」

十代：手札4

モンスター1

リバーズ1

「私のターン ドロー。」

「手札から『融合』を発動、場の『エトワール・サイバー』と手札

の『ブレード・スケーター』を融合。」

「私の思いを背負いし戦士！舞い踊れ！『サイバー・ブレjder』」

A / 2100

「『サイバー・ブレjder』に『フュージョン・ウエポン』を装備。効果で攻撃力が1500アップする。」

A / 3600

「バトル！！『サイバー・ブレjder』で『アブソルート』に攻撃！グリッソード・スラッシュ！」

「危なかったぜ明日香、リバーカードを伏せてなかったら大ダメージを受けるところだったぜ！リバーカード発動！『融合解除』、『アブソルート』の融合を解除して墓地から融合素材となった『エアーマン』と『バブルマン』を特殊召喚。『エアーマン』の第2の効果発動。デッキから『バーストレディー』を手札に加える。そして『アブソルート』の効果発動！相手フィールドのモンスターをすべて破壊する！」

抵抗もできずに『サイバー・ブレjder』は凍らせられていく。

「連続でこの状況からアドバンテージを稼いだ！？こんなのあるえはないは！」

『エアーマン』の使いまわしと、『アブソルート』はHEROデッキの切り札の切り札的存在だ。ここに『オーシャン』が加わると『

エアーマン』の使いまわしがひどくなって過労死状態に。

「明日香のバトルフェイズはまだ続いているぜ？」

「メインフェイズ2でリバーズカードを2枚伏せてターンエンドするは」

明日香：手札1

モンスター0

リバーズ2

「俺のターン ドロー。」

十代はドローしたカードをみて笑った。

「明日香このデュエルはこのターンで終わりみたいだな。」

「…」

「俺は手札から『大嵐』を発動！」

リバーズカードは『奈落の落とし穴』と『攻撃の無力化』か、『奈落』ってww  
結構ひどいカードいれてんだな。

「『融合』を発動手札の『バーストレディー』と『フェザーマン』を融合！」

「マイファイバリットヒーロー！飛び立て！」E・HEROフレイム・ウイングマン」

A / 2100

この状況でフレイムウイングマンを呼んだか。さすが十代というべきか。

「『フレイム・ウイングマン』でダイレクトアタックフレイムシュート！」

LP1500 1600

「ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ明日香！」

「私がこんなにあっさり負けるなんて。あなたの強さは本物のようね。」

「入学試験の時には見なかったHEROが入ってたけど彩人からもらったのかしら？」

「そうだぜ！彩人と俺を繋ぐ絆のカードだ！！」

「そんな恥ずかしいこと言ってくれるな十代。」

「まあ、なんにしてもいいデュエルだったぜ。」

「負けちゃったけど楽しいデュエルだったは、次はアキたちのデュエルね。」

「うん 楽しいデュエルができるといいな。」

「アキは強いからな。全力でいかせてもらう。」

正直『クリスティア』と『光と闇の竜』を出されたら積むからな。

あのデッキを使ってみるかな。

エースモンスターを先に出さないと厳しいかもしれない、けどそこが面白い。

「さて始めようか。」

「デュエル!!」

## 第八話 明日香VS十代（後書き）

『エアーマン』と『アブソ』は強いですよね。  
大抵融合すると『アブソ』を出しますよね。

次回はやっとアキと彩人のデュエルです。

5dsのエースモンスターを出したいと思っています。  
アキのデッキの関係上特殊召喚を生かすデッキは難しいです。

## 第九話 VSアキ（前書き）

明けましておめでとございます。  
初詣行ってきました。

アクセスが1万を超えていてとてもうれしい限りです。  
これからも読んでいただけると嬉しいです。

今回はぎりぎりのデュエルにするためにいろいろ工夫しました。  
シンクロ召喚するときの言葉って考えるの難しいですね。

## 第九話 VSアキ

「デュエル!!」

「先行は俺からだ。ドロー!!」

アキのデッキには俺のデッキは不利すぎる。だからこそ最初から飛ばしていく…はずだったが、手札が悪い。対処しなければいけないのは『クリスティア』と『ライトアンドタワー光と闇の竜』この2体だ。『光と闇の竜』は今ある手札で十分に対処できる。ただし一緒に『クリスティア』が並んだら対処できなくなってしまう。

そこは手札に来ていないことを祈るしかないな。そのまえに…

「ひとつ提案なんだが、ライフポイントを8000にしてデュエルしないか？」

「4000だとすぐ終わってしまいそうだからな。」

「わかったよ。彩人君がその方がいいなら。」

「ありがとう。」

これで楽しめそうだな。

「俺は手札から『調律』を発動。デッキから『クイック・シンクロン』を手札に加える。そしてデッキの一番上から一枚墓地に送る。さらに『増援』を発動。デッキから『ジャンク・シンクロン』を手札に加える。」

「僕達が知らないカードみたいすね。」

「彩人はあのカード達で何をするつもりなんだ？楽しみでわくわくしてきたぜ！！」

「彩人、私たちの予想を超えていくのね。」

「やっぱり彩人君は不思議。」そしてかっこいいノノ

「俺はモンスターを一枚伏せ、リバーズカードを2枚伏せてターンエンド。」

最初から飛ばしていけないなら準備を整えていく。  
手札には優秀なリバーズ効果を持ったモンスターがいたからな。  
このモンスターならワンターンキルはされないはずだ。

彩人：手札3

モンスター1

リバーズ2

「私のターン ドロー。」

どうやらわからないカードを使っているせいかどっつ風にせめて  
いいかわからないらしい。

情報のアドバンテージはデュエルでは大きいな。

「私は手札から『ヘカテリス』と『テラフォーミング』を発動。デッキから『神の居城ーヴァルハラ』と『死皇帝の陵墓』を手札に加えます。」

おいおい、いきなりワンターンキル圏内かよ。

「さらに『トレードイン』を発動して2枚ドロ。そして、『天使の施し』を発動して3枚ドロして2枚捨てる。」

手札交換しすぎてる。

このまわり方はやばい。

墓地に確実にそろってやがる、アキはプレイングもすごいが運も味方につけているのか。

「私は『ヴァルハラ』を発動して『堕天使アスモディウス』を召喚。」

A / 3000

「そして効果発動。デッキから『アテナ』を墓地に送ります。さらに『陵墓』を発動ライフポイントを2000払って「それにチェインさせれもらうぜ『サイクロン』を発動」そんな!？」

アキLP 8000 6000

「『陵墓』の効果のライフを支払うのはコストだからな、ライフポ

イントは減るが召喚は成功しない」

「くっ バトル！ 『アスモディウス』 でモンスターに攻撃ダークフレア」

黒い炎がモンスターを襲う。

「この瞬間 『ライトロード・ハンターライコウ』 のリバース効果発動。 『アスモディウス』 を破壊させてもらう。そしてデッキから3枚墓地に送る。」

『ライコウ』 が攻撃を素早くかわして近づいていき 『アスモディウス』 に渾身の力でかみついた。

墓地に落ちたカードは最悪だが一枚だけいいカードが落ちた。

「破壊された 『アスモディウス』 の効果で、 『ディウストークン』 と 『アスモトークン』 が出ます。 このトークンはバトルフェイズに出たため攻撃ができます。 トークン達で攻撃。」

二体が力を合わせて光線を放ってきた

「 『アスモトークン』 の攻撃は 『くず鉄のかかし』 で防がせてもらうぞ。」

『かかし』 が 『アスモトークン』 の攻撃を受け止めた。  
まさかここで先生が活躍するとはな。

LP8000 6800

「私はメインフェイズ2に二体のトークンをリリースして 『光と闇

の竜』を召喚します。」

A / 2800

「さらにリバーズカードを一枚伏せてターンエンド」

アキ：手札1

モンスター1

リバーズカード1

『ヴァルハラ』

「彩人厳しいかもしれないわ」

「どうしてだよ明日香？彩人ならこの状況から挽回するのなんて簡単だろ？」

「そつつすよ明日香さん。」

「はあ、『光と闇の竜』は4回まで攻守を500ポイント下げることとで、魔法・トラップ・モンスター効果を無効にできるのよ。」

「そんな効果があるんっすか！？やばいじゃないっすか？」

「それでも彩人はやってくれると思っぜ！」

「俺のターンドロー。」

まずいな、ライダーが出てくるとは、『陵墓』つぶしてなかったら

ライフポイントが4000だったらワンキルされてたわけだ。  
ライダーは処理できるがそのあと対処できるか。  
墓地にあいつらがいるはずだ。

「スタンバイフェイズに墓地の『黄泉ガエル』の効果発動。」

アキがまずい顔をした。

「アキならどうなるかわかるよな？『光と闇の竜』の効果は強制効果だ。そして『黄泉ガエル』はスタンバイフェイズに何回でも効果を発動することができる。」

「どつなるんっすか？」

「『光と闇の竜』は強制的に効果を発動して無効化してしまうのよ。そして4回までしか無効にはできない。『黄泉ガエル』は何回でも効果を発動することができる。これで『光と闇の竜』は効果を無効かできなくなってしまうのよ。」

「俺には難しくてわからないけど。彩人のやつすげえな！」

D / 100

「リバーズカード発動『サンダー・ブレイク』コストとして『ダンディライオン』を墓地に送って『光と闇の竜』を破壊する。」

「この瞬間『光と闇の竜』の効果発動します。墓地から『墮天使スベルビア』を蘇生して、『スベルビア』の効果で『アテナ』を蘇生

します。」

『スペルビア』 A / 2900

『アテナ』 A / 2600

「『ダンディライオン』の効果で『綿毛トークン』が2体でる。」

D / 0

手札がかみ合わないな。

これでしのぐしかない。

「俺はこれでターンエンド」

彩人：手札3

モンスター3

リバーズ1

「私のターン ドロー。」

やばいな、『アテナ』のループが来る。

「『アテナ』の効果発動『スペルビア』をリリースして、墓地から『スペルビア』を特殊召喚、効果でもう一体の『アテナ』を蘇生。『アテナ』のもう一つの効果を発動。天使族が召喚・特殊召喚されたとき600ポイントダメージを与える。2体特殊召喚したから1200のダメージ。」

彩人LP6800 5600

「もう一体の『アテナ』の効果発動。『スペルビア』をリリースして『スペルビア』を蘇生、墓地の『クリスティア』を蘇生。2体の『アテナ』の効果で2400ポイントのダメージ。」

『クリスティア』 A / 2800

彩人LP5600 3200

「『サイクロン』を発動してリバーズカードを破壊します。」

せんせえ~~~~~

「バトル！2体の『アテナ』と『クリスティア』で2体の『綿毛トーンクン』と『黄泉ガエル』に攻撃！ライトジャスティス」

「『スペルビア』でダイレクトアタック！」

攻撃名は言わないんだww

LP3200 300

「これでターンエンドします。」

アキ：手札1

モンスター4

リバーズ1

「やべえやつぱりアキは強い。俺がこんなに追い詰められるなんて」  
「うぬぼれじゃないがこの世界に来てから、もとからあったタクティクスに加えて神様からもらったドロー運がある。なのに追い詰められている。」

「このドローで決まるんだな。」  
俺は目を閉じて自分のデッキを信じ静かに引き抜いた。

「いい答えだな。俺は手札から『月の書』を発動して『クリスティア』を裏側守備表示する。」

「どうして裏側守備表示にしたんだ？」

「あなたは覚えていないのかしら？『クリスティア』には特殊召喚をできなくする効果があるのよ。」

「そつえばそつという効果あつたすね。」

「このターンで決めさせてもらう！」

「手札から『グローアップ・バルブ』を捨てて、チューナモンスター

「『クイック・シンクロン』を特殊召喚」

D / 1400

「さらにチューナモンスター『ジャンク・シンクロン』を通常召喚。」

A / 1300

「『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効かして守備表示で特殊召喚できる。戻ってこいチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』。そして墓地からモンスターを特殊召喚したことにより、手札から『ドツベル・ウオリアー』を特殊召喚」

『バルブ』 D / 1000

『ドツベル』 D / 800

「レベル2『ドツベル・ウオリアー』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング。」

「集めし情報が、新たな人の境地への道を切り開く。冴えわたれ！シンクロ召喚！カモン『TGハイパー・ライブラリアン』」

A / 2400

「『ドツベル・ウオリアー』がシンクロ召喚に使われたとき攻撃表示でレベル1・攻撃力、守備力400のトークンを2体残す。」

「レベル1『ドツベルトークン』1体にレベル1『グローアップ・バルブ』をチューニング。」

「集いし願いが、新たな速さを生み出す。新たな境地へ！シンクロ召喚！走り抜ける、シンクロチューナー『フォーミラー・シンクロン』」

D / 1500

「この瞬間『ライブリアン』と『フォーミラー』の効果が発動する。『ライブリアン』はシンクロ召喚がおこなわれたとき1枚ドロウする。『フォーミラー』も自身がシンクロ召喚に成功した時1枚ドロウすることができる。よって2枚ドロウ。」

「さらに、レベル1『ドッペルトークン』にレベル5『クイック・シンクロン』をチューニング」

「集いし願いが、ふさがれたわれの道を突き崩す。その手に力を！シンクロ召喚！突き崩せ『ドリル・ウォリアー』」

A / 2400

「『ライブリアン』の効果で1枚ドロウ。そして墓地の『バルブ』の効果発動デッキの一番上のカードを墓地に送って特殊召喚できる。墓地にある『調律』を除外して『マジック・ストライカー』を特殊召喚。」

「レベル3『マジック・ストライカー』にレベル1『バルブ』をチューニング」

「集いし願いが、優しき力を掴み取る。われに力を！シンクロ召喚！掴み取れ『アームズ・エイド』」

A / 1800

「『ライブリアン』の効果で1枚ドロウ。」

「すごい！こんなにも簡単にシンクロ召喚を連続して行っなんて！  
すごいすぎるぜ彩人！」

「私たちの想像をはるかに超えているは。手札が3枚に戻っている  
もの。」

「彩人君かつこよすぎるっす。」

「こんなにすごいなんて。この後になにが起こるか楽しみになって  
くる。このデュエル負ける気がする。」

「これはとっておきだぜ。俺はこのデュエル本気だからな。」

「レベル6『ドリル・ウォリアー』とレベル4『アームズ・エイド』  
にレベル2のシンクロチューナー『フォーミラー・シンクロン』を  
チューニング！」

「レベル12のモンスターだって!？」

「それにシンクロチューナーって今までと違うわ」

「集いし願いが、優しき新たな世界を作り出す。新たな力を求めて  
！リミットオーバー・アクセルシンクロオ！救い出せ！『シユータ  
イング・クエーサー・ドラゴン』」

A / 4000

「攻撃力4000だって!？」

「でもとてもキレイ。」

「かつこいいつす。」

「あんなモンスターを生み出す彩人君かつこいいい／＼」

「『ライブラリアン』の効果で1枚ドロー」

「手札から『死者蘇生』を発動。墓地から『フォーミラー・シンクロン』を蘇生させる。」

レベル4になった『ライブラリアン』にレベル2のシンクロチューナー『フォーミラー・シンクロン』をチューニング。」

「封印されし、氷結界の力が解き放たれるとき。すべての世界を凍らせる!シンクロ召喚!いざ氷の世界へ『氷結界の龍ブリューナク』」

A / 2300

「このモンスターはめったなことでは出すつもりはない。」

「彩人君それはどうしてなの?」

「効果が強すぎるからだ。今その効果を発動する。」

「『ブリューナク』は手札1枚を捨てることにフィールド上のカードを持ち主の手札に戻すことができる。俺の手札は『ライブラリアン』の効果で手札が増えて今は3枚ある。そして『貪欲な壺』を発

動して2枚ドロ。4枚すべて捨て、2体の『アテナ』と『スペルピア』、裏側守備表示の『クリスティア』を手札に戻す。」

「そんな！？私の場のモンスターがすべて戻されてしまった！？」

「あのカード強すぎるは！」

「バトル！『クエーサー』でダイレクトアタック。『クエーサー』はシンクロ召喚に使用したシンクロチューナー以外のシンクロモンスターの数だ攻撃することができる。よって2回攻撃することができる。天地創造撃ザ・クリエーションバースト」

「待つて、リバースカード発動『サンダー・ブレイク』手札を一枚捨てて、『クエーサー』を破壊する。」

「『サンダー・ブレイクに』チェーンして『クエーサー』の効果発動！1ターンに1度、魔法・トラップ・モンスター効果を無効にして破壊する。」

「そんな効果まであるの！？」

LP6800 2800 2800 11200

「楽しいデュエルだったぜアキ。」

「うん 楽しかった／＼」

「あの二人は次元が違う気がするは。」

「あのドラゴンどうやったたら倒せるかな？なんかわくわくするな！」

「僕には無理っす。」

「約束どおり翔君は返すは。」

「サンキュー明日香。今度はお前ともデュエルしたい。」

「その時は全力でいかせてもらっは。」

こうして無事に？各自寮に戻っていったのである。

くおまけく

「この気持ち恋ってやつなのかな？」

彩人君のことばかり考えてしまう。

「俺ってアキのことが好きなのか？」

あのデュエルする姿はかっこいい、だけど普段はおとなしくてかわ

61  
61°

## 第九話 VSアキ（後書き）

『サンダー・ブレイク』の使いどころを二人とも間違えていると思います。

彩人は『ライダー』を破壊しなければもっと簡単に勝っています。

アキは『ライブラリアン』を破壊すれば悲惨なことになってません。

彩人の場合は、デュエルを面白くするために。

アキの場合は情報のアドバンテージという事にしてください。

『先生』は本当のデッキには入れてません。

二体とも破壊しないでダメージを軽減できるカードで考え付いたのが『先生』でした。

内容が薄いですが勘弁してもらえるところうれしいです。

第十話 VS三沢 実技試験全編（前書き）

今回は長くなってしまいそうだったので分けました。  
続きはかけたら更新します。

第十話 VS三沢 実技試験全編

ラブレター事件が終わって数日が経って月1試験の日がやってきた。

「やばいっすよアキ〜」

「試験なんてどうでもいいって。」

「十代、少しは気にしろよ。」

俺は今十代達の部屋にいる。

「彩人君はそんなこといってて大丈夫なの？」

訂正、なぜかアキまで来ていた。

「俺は大丈夫だ。それよりなんでアキがここにきているんだ？」

「私はその…ここに来ると楽しいかな〜なんてノノ  
本当は彩人君に会いたくなかったなんて言えないよ。」

「そっか。それなら十代達に勉強教えてやったらいいんじゃないか  
？」

「私、教えるなんてできないよ。」

彩人君は鈍感なんだね。残念なような安心したような。

「まあ試験は何とかなるって！それより彩人デュエルしようぜ！」

「また今度な、眠くなってきた。お前たちも早く寝ないと遅刻するぞ？」

「しかたないな、じゃあまた今度デュエルしような！」

「翔も祈ってないで勉強するか寝ろ。俺はアキを送ってから寝る。」

「「ごゆっくりー」「

なぜか翔と十代がそんなことを言っていた。

それからアキと会話しながらブルーの女子寮まで送っていった。

「今日はありがとうね 明日はお互いにガンバろ」

「ああ、また明日な。」

原作どおり十代は遅れて試験会場に遅れて入ってきた。だが前日に寝ることを進めたため起きて試験問題には向かっていた。

「彩人君、試験どうだった？」

「俺は全く問題なかったぞ？そういうアキは大丈夫なのか？」  
もともと俺は高校生だったからな。それに遊戯王の問題なら得意な方だ。

入学試験の時は、解答欄を間違えていたらしい。  
本当は受けてないのになんて理不尽な。

「私も大丈夫だよ」

「あの二人ってなんで付き合っていないんすかね？」

「二人も素直じゃないのよ。」

明日香と翔が何かを言っていたとき。

「どうして俺の相手は三沢なんだ？」

時は立って俺の実技試験の番だ。

間には新しいパックが売り切れていたり、十代がクロノスが買い占めたカードで強化された万丈目とデュエルして圧勝したりとわりと

いろいろなことがあった。

『打ち出の小槌』のアニメ効果ってチートだよな。

「シニョール南は、私に勝ったデュエリストなノーネ。ライイエロ  
ーのトップのシニョール三沢ぐらいじゃないと相手にならないノー  
ネ。」

これでショール三沢に勝たせて入学試験の恨みを晴らしてやるノー  
ネ。

「まあ、三沢とはデュエルしてみたいと思っていたしな。望むところだ。」

「俺は彩人のデュエルを研究して新たなデッキを作り上げてきた。  
負けるつもりはないぞ。」

そういえばアニメの三沢って相手のデッキを研究してそれに合わせ  
てデッキを組むんだっとな。  
要するにメタデッキなわけだ。

まっ対策されてるならそれを崩すのも面白いが、今日の持ってきて  
いるデッキは残念ながらシンクロデッキじゃないんだけどなw

「なあ三沢、対策してきたのはいいが俺がシンクロを使うデッキを  
使うとは限らないぞ?w」

「……………ええ?」

「まあ、そのなんだ。お詫びと言ってはなんなんだが二つの中でど  
ちらか選ばせてやるよ。三沢は青色と黒色どっちが好きだ?」

「俺は青色の方が好きだ。」

「そうか、なら俺はこのデッキにするとしよう。」  
「そういつて一つのデッキを取り出してデュエルディスクに入れた。  
このデッキは使い方が難しい。  
その分回ればこの世界のデュエルなど簡単に勝ててしまう。」

「デッキが違うなら研究したデッキじゃ意味ないな。俺は安定した強さを持つこのデッキを使うとするか。」

研究したデッキも気になるな後で見せてもらおう。

「それではデュエルを始めるノーネ。」

「「デュエル？」」

「先行は俺！ドロー」

先行は三沢らしい。

「俺は『ライオウ』を召喚。」

A / 1900

でてきたかライオウ、チェーンに乗らない特殊召喚を止められる優秀なアタッカー。

サーチカードも使えなくなってしまう。

「俺は『強者の苦痛』を発動して、リバーズカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

三沢：手札2

モンスター1

リバーズ2

『苦痛』

「俺のターン ドロー。」

これはきつい。

あのリバーズカードが怖いな。それに、モンスターのレベル×100攻撃力下げられてしまう『強者の苦痛』がある。俺のもう一つのデッキならば『強者の苦痛』の影響を受けないカードを軸としたデッキなんだけどな。

さすが安定したデッキって言うてるだけの事はあるな。さてどう攻めるものか。

「俺は『ライトロード・パラディン ジェイン』を攻撃表示で召喚。」

A / 1800

「『ジェイン』のレベルは4『苦痛』の効果で400ポイント攻撃力を下げてもらおう。」

A / 1800 1400



「くっまた俺の知らないカードにやられた。」  
効果を知っていればリバーズカードで対処できていたのに。

「これでサーチも出来るようになったな。俺は『光の援軍』を発動。デッキの上から3枚墓地に送り、『ライトロード』と名のついたモンスターカードを手札に加える。デッキから『ライトロード・マジシャン ライラ』を手札に加える。そしてコストで墓地に行った『ライトロード・ビースト ウォルフ』を特殊召喚。このカードは通常召喚が行えない代わりにデッキから直接墓地に送られた時、墓地から特集召喚する。」

A / 2 1 0 0

「なんて無駄がないの？」

「彩人君はやっぱり凄いつす？」

「やっぱり彩人とデュエルしたいぜ？このあとなにが起きるかワクワクしてきたぜ。」

「彩人君ってどんなデッキでも使えるのかな？／／」

「さすがにその特殊召喚は通すわけにいかないな。リバーズカード発動『強制脱出装置』、『ウォルフ』には手札に帰ってもらおう。」

「まずいわね。」

「どうしたんすか？明日香さん。」

「丸藤さん、彩人君の説明聞いてなかったんですか？『ウォルフ』は通常召喚が行えないカードみたいですよ。」

「どうでもいい事なんだけど、今僕アキさんとの壁を感じたよ。」

「名前で呼ばれるのは彩人の特権の様ね。なんにせよ『ウォルフ』どうやって対処するか見せてもらいましょうか。」

「手札から『ソーラー・エクステンジ』を発動。手札から『ライトロード』と名のついたモンスターカードを捨てて発動する。手札から『ウォルフ』を捨てて2枚ドロウして、その後デッキの上から2枚墓地に送る。」

「ほんとうに無駄がない。デメリットモンスターをうまくコストにして次につないでいる。しかし『ライトロード』というカテゴリは墓地にカードを送る効果が多いみたいだ。墓地に送りたいカードがあるのか？」

「いい予想をしているよ三沢。墓地に送りたいだけではないんだけどな。」

今はこのぐらいにしておくか。

「俺はエンドフェイズに『ジェイン』の効果でデッキの上から2枚

墓地に送る。」

彩人：手札5

モンスター1

リバー0

「リバーカードがないなんて珍しいわね。」

「モンスター1体だけじゃ心配す。」

「もしかしたら彩人君のあのデッキにはリバーカードがあまり入っていないんじゃないかな？墓地に送るのを目的としているのならリバーカードが落ちて意味がないんじゃないかな？」

「俺のターン ドロー。」

「俺は『魔導戦士ブレイカー』を召喚。」

A / 1600

「このカードは召喚に成功したときに魔力カウンターが乗っかる。乗っかっている魔力カウンターの数だけ攻撃力が300ポイント攻撃力があがる。」

A / 1900

「あのカード強くないっすか？攻撃力がものすごく上がるじゃない

「つすか。」

「『ブレイカー』は魔力カウンターは最大一個までしか乗せられないのよ。」

「丸藤さんはもう少し勉強してください。」

「ごめんなさい。」

「『ブレイカー』で『ジェイン』に攻撃！魔導剣一閃。」

『ジェイン』が『ブレイカー』に切られてしまった。

LP4000 3900

「俺はこれでターンエンドだ。」

三沢：手札2

モンスター1

リバース1

「俺のターン ドロー。」

さてここからどうするかな。

手札はこれで6枚、そして手札には青色の枠のカードが来ている。まず初めはこのカードかな。

「墓地の『リチュアの儀式水鏡』の効果を発動。このカードをデッキに戻して墓地の『リチュア』と名のついた儀式モンスターカードを

手札に加えることができる。」

「儀式つてなんだ？」

「彩人君また新しいカード使ってる。」かつこいいなノノ

「儀式カードと儀式モンスターカードを手札にそろえて、儀式モンスターレベルを超えるように手札かフィールドからモンスターを生贄にするのよ。」

「そんなややこしいの僕にはできないっす。」

「それができるのは、彩人のプレイングテクニクね。」

「俺は『イビリチュア・リヴァイアニマ』を手札に加える。」

「そして……………」

第十話 VS三沢 実技試験全編（後書き）

『ライトロード』を軸とした『リチュア』デッキです。  
これからの展開は書くのが難しいです。

次で実技試験は終わるはずですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6547z/>

---

遊戯王GX 時代を超えた転生者

2012年1月3日01時46分発行